

## マレーシア・ペナン島の海上集落 姓棧橋 (Clan Jetty) にみる住まいの文化

長野真紀

神戸芸術工科大学建築・環境デザイン学科 教授

日本を含む東・東南アジアの水域は、船や筏、高床式住居が卓越する地域の一つである。その背景を探ると、漁労文化を主とする生業、文化的・民族的な生活形態、地理的要因、高温多湿と害虫からの防除に大別でき、民族性と地域風土が水上の住まいに強く影響している。しかし、住まいの文化的発展とともに生活空間の安定性が求められるようになり、水上に暮らす民は減少し続けている。

このような水上居住の歴史的な流れに逆らうように、マレーシアのペナン島・ジョージタウンには約130年の歴史をもつ海上集落が現存している(図1)。中国福建省沿岸部の陸地に居住していた民が海上へと住む場所を移し、新しい住まいの図式を構築した。ここでは、従来の技術的な建築の進化にはない、人々の暮らしの発展による居住文化の変容をみることができる。

### 集落の分布と歴史的経緯

マレー半島の旧イギリス海峡植民地へ19世紀に移住してきた華人移民とその子孫は、初期の移住と定住パターンの典型として、同氏族が結束する傾向にあった。移住当初は、陸地のショップハウス(1階を店舗、2~3階を住居として使用する長屋形式の住まい)に居住していたが、港・棧橋での事業発展とともに現在の居住地である海上へと移り住んだ。ジョージタウンはペナン島の海岸で最も早く栄えた場所で、多くの船舶が停泊できるよう波止場と公共棧橋がつけられ、休憩小屋が建ち並ぶようになったのが集落の原型である。住む場所としての住居が建ち始めた当初は英国植民地政府により法的に承認されていたが、1957年のマラヤ連邦独立後は所有権のない開拓地(海)に定住する不法占拠者として位置づけられ、絶えず取り壊しの危機に



図1 ジョージタウンのまちなみと海上集落 (2024)



図2 観光客で賑わう商業区 (2019)

直面してきた。

1900年代半ばには全長1.2kmの範囲内に最大15集落が確認されているが、フェリーターミナル開発の波にのまれ、1960年代以降は、7集落（王・林・周・陳・李・雑・楊）を残すのみとなった。棧橋に同族が集まって住んでいることから、集落は姓棧橋（Clan Jetty）と呼ばれている。2008年に世界遺産に登録され観光地となった現在は、昼夜を問わず多くの来訪者で賑わっている（図2）。

### 棧橋に開かれた高密度な生活空間

2018年に初めてこの地を訪れた際、水上生活と空間の豊かさに魅了され、これまで10数回の調査を重ねてきた。最大規模を誇る周集落には75戸の住まいがあり、居住者数は200～300人で推移している。持ち家だけでなく、空き家、賃貸、週末専用住居などがあり、住まい方も多様である。建物はバカウ（Bakau）と呼ばれる木材を基礎にし、その上に床を張り、2室以上の居室から構成される。家族の増加にともない増築を繰り返し、高密度な住居群が形成されているが、一步建物のなかに入ると喧騒から切り離され、波打つ海水の音が心地いい。

1969年に新築が制限され、現在は建物の外観に変化を及ぼす改築・改修にも多くの規制がかけられている。色、建築材料、高さを遵守する必要が



図3 生活用品が表出する居住区（2022）

あり、GTWHI（George Town World Heritage Incorporated）が申請時のサポートを担っている。一方で内装工事の規制は緩く、生活の変化や家族数の増減、老朽化などに対応するため、多くの建物でリノベーションが行われている。

建物の前には五脚基（five foot way）と呼ばれる軒下のオープンスペースがあり、昔は子どもの遊び場、女性たちの集いの場、漁労作業の場、食事の場など、建物と棧橋をつなぐ中間領域として機能していた。家の扉を開けたまま、人や風、ネズミなどの小動物も出入りしていたが、近年は観光化がすすみ、防犯・安全の面から施錠する家も増えている。一方で、五脚基や入口に面した一室を貸し出し、土産物や飲食を提供する店舗も増加傾向にあり、暮らしと観光が共存している（図3）。

### 人の営みがつくり出す風景

調査の際には必ず訪問する家が数軒ある。姉妹で商売を営んでいる店舗兼住居、1人暮らしのおばあさん宅、大家族が居住する住まい。訪問すると、みな笑顔で迎え入れてくれ、「今回はいつまでいるの？」と話しかけてくれる。ほかにも顔見知りとなった多くの住民とコミュニケーションをとりながら、彼らの日常をみせてもらっている。集落の歴史、子どものころの生活、世界遺産認定後の暮らしの変化など、それぞれの断片的な記憶がパズルのように繋がり、集落の1つの物語としてかたちになり始めている。そこには必ず居住者の姿があり、建造物、自然環境とともに人々の暮らしがまちなみを構成する1つの要素であることを教えてくれる。

Covid-19でまち全体がロックダウンした時期に送られてきた現地からの写真には、人の姿と生活のにおいが消え、静寂に包まれた風景が収められて



図4 集落入口の広場で行われた春節の行事（2023）

いた。それから2年、大きな爆竹の音とともに始まった春節の行事に参加した。集落入口の広場に設置された巨大な祭壇と無数の蠟燭、集落内外から訪れる活気に満ち溢れた人々が作り出す空間は神秘的であった（図4）。

小さな仮設小屋から始まった住まいは、戦災や人災によりかたちを変えながら、長い歴史を生き続けてきた。20年、30年後、ここで育った子どもたちが、生活や環境の変化とともにどのように住風景を継承していくのか興味深い。

#### 参考文献

- 1) 畔柳昭雄 編著『消えゆくアジアの水上居住文化』（鹿島出版会、2018）
- 2) George Town World Heritage Incorporated「GEORGE TOWN SPECIAL AREA PLAN」（2016）



#### 長野真紀（ながの・まき）

神戸芸術工科大学建築・環境デザイン学科教授。神戸芸術工科大学大学院博士課程修了。兵庫県篠山市の地域再生業務に携わり、2013年より現職。専門は住環境計画、住生活学。東・東南アジアの集落、住まい、生活に関する研究に従事し、兵庫県内の都市計画・まちづくりの専門委員も務める。博士（芸術工学）